

E・A・ゴルドンの人と思想

——その仏耶一元論への軌跡——

中村悦子

はじめに

第二回比較思想学会、記念展示「比較思想と早稲田大学——大隈重信・ゴルドン夫人・朝河貫一——」のテーマに則して、ゴルドン夫人について研究の一端を述べてみたい。

この展示が主に依拠しているのは「早稲田大学ゴルドン文庫」であるが、これは英国の比較宗教学者エリザベス・アンナ・ゴルドン(Elizabeth Anna Gordon 1851-1925)が、原始キリスト教と仏教の比較を主な目的として、アジア各地で収集した器物(仏像、掛け軸など)五八六点と、その研究のための英書一四四三冊から成り、一九一六年に早稲田大学に寄贈されたものである。現在、判明しているゴルドン自身の編著書、論文、一五点のうち、一〇点がこの中に含まれている。

これらは、創設者ゴルドンの思想をたどるためにも、また二〇世紀初頭における英国のアジア研究や比較宗教学の実態を知る上でも、得がたい資料である。だが現在では、この文庫の存在や創設者ゴルドンのことを知る人は極めて少なくなってしまった。私自身も、数年前にロンドンで、日本女子教育の先駆者下田歌子の欧米女子教育視察の史料を集めていた時に、はじめてゴルドンの名を知ったのである。

当時、華族女学校の学監であった下田は、この欧米視察によって庶民教育の重要性を悟り、帰国後、帝国婦人協会を組織して、実践女学校や女子工芸学校などを開校している。女子教育の一つの転機をもたらしたといえるこの留学中、下田を「宮の下」と名づけた自邸に寄宿させて、各種の教育視察はもとより、ヴィクトリア女王への謁見や自由党女子部の議案検討会なども体験させた

英国の一女性がいた。それがゴールドン夫人だった。

下田の外にも当時の在英日本人でその援助を受けた者は多く、彼等によってゴールドンは「英国における日本の母」と呼ばれていた。それであるのに、当時の諸資料にはフルネームが記されておらず、下田研究の中心資料とも言える『下田歌子先生伝』にはサムエル・ゴールドンと誤記されていたためであろうか、ゴールドン夫人の実像は知られないまま現在に至った。

それだけに、ジャバン・ソサエティ創立の資料からゴールドンの本名を発見した私の喜びは大きく、さらにその彼女が、後年、日本に在任して早稲田大学ゴールドン文庫を創設したことを知った時の驚きは一層大きかった。早大旧図書館創立の当初から、通用口の両側に据えられていた一对の羊の石像も、彼女がキリスト教東漸の証拠として、朝鮮義州で入手した研究資料であった。下田を世話した日本最良^{ゴッ}の親切的な貴族夫人と、比較宗教学者としての彼女の乖離に戸惑いと興味を抱きながら、私のゴールドン研究は始まったのである。

私はいま、日清戦争、日露戦争、そして第一次世界大戦と続いた一九世紀末から二〇世紀前半にかけての激しい歴史の渦の中で、日本と英国を、また仏教とキリスト教を結ぶことに一生をかけた彼女の波乱の生涯を、大まかではあるが、一貫して把握できたように思う。

専門外の私としては、比較思想としてのゴールドン研究の端緒と

なることを願って、半生を仏耶一元の検証と信仰に捧げるに至った彼女の生の軌跡を本稿に記してみたい。

(一)

エリザベスは、一八五一年、マンチェスターのクラムセールで下院議員J・S・ヘンリー(John Snowdon Henry)の長女として誕生した。祖父はA&Sヘンリー綿業会社を興し、産業革命の波に乗って一代で巨富を築いたブルジョアジエで、コブデンやブライト等と穀物条例撤廃をかちとった自由主義マンチェスター派の下院議員でもあった。その祖父を育てた伯父、エリザベスにとっては曾祖伯父に当たる人物は、アメリカ最初の図書館をフィラデルフィアに作ったという。後年ゴールドンは「彼は今もなお現地で偉大なアレキサンダーと呼ばれている」と誇りをもって書き記している⁽¹⁾。このことが後述するように日英文庫や、早大文庫、高野山大文庫などを創設した彼女の行動の原点となったのである。親族に聖職者が多く、信仰厚く育った彼女は、二〇歳前後の若さで宗教関係の本を続けて出版するほど宗教への深い関心を示した。そして、まだ女性の入学が許されなかった一八七〇年代にオックスフォード大学のF・M・ミューラー教授に直接師事している⁽³⁾。それはこの頃ミューラーが比較宗教という新分野を拓いた事に共鳴したためであろう。それ以降、長くミューラーに師事した事により、彼女はそこに学ぶ日本の仏教学者南条文雄や高楠順次郎、

土宜法龍等を知り、日本文化や仏教に目を開かれていったのである。

二七歳の秋、彼女はスコットランドの名門貴族ゴールドン卿(Edward Strathearn Gordon)の長男J・E・ゴールドン(John Edward Gordon)と結婚し二男三女をもうけた。夫ジョンはインバネスに近いエルジン、ネアン地方をふり出しに保守党議員を長くつとめ、また祖先の遺産とロウフォード商会の経営で財をなした。当時の地方新聞の記事によると、伝統を重んじる堅実な実務家で、祖父や父に似て自由闊達な行動派の夫人とは、対照的な性格であったように思われる。

一八九一年ゴールドン夫妻は家族とともに世界一周旅行に出発し、その途中でかねてから興味を抱いていた日本を訪れた。夫人にとって日本は想像以上に魅力的な国であつたらしい。彼女は帰国後すぐに*Clear Round a Temple of The Orient*を執筆した。

この二著、とくに旅行記*Clear Round* (『周遊』)は記述の多くを日本にあてて、清潔で上品で屈託のない人々の住む美しい自然に恵まれた国として描き出した。同じ英国女性イサベラ・バードが一八八〇年に日本を描いた*Uneaten Tracks in Japan*がベストセラーになったのと同様に『周遊』もたちまち版を重ねて読まれた。ゴールドンがバードのこの著作の影響をうけたであろうことは、この本が同じ著者の*Korea & Her Neighbours*とともに早大ゴールドン文庫に収められている事によって明らかである。二

人の見た日本には十年の差があり、その間の日本の進歩を念頭に置いても、なおこの二女性の旅行記には決定的な相違があつた。それは、バードが日本の未開に視点をあてて、事実を忠実に描こうとしたのに対し、ゴールドンは歴史を背景に日本の伝統文化と近代文化の混在を描き、新島襄の伝記によって日本のキリスト教をアピールするなどして、単なる異国趣味ではない「新しい日本」を印象づけようとした点であつた。

日本の未開のイメージを払拭し、日英同盟の必要を論じたこの本が、日清戦争を目前にして、ロシアを牽制する必要に迫られ、英国の支援を得ようと日英条約の改正に懸命な努力を重ねていた当時の日本にもたらした功績は大きかつた。

一八九四年に日英新条約が締結されたとき、条約成功の蔭の功勞者として、ゴールドンが高く評価されたのは、このためであつた。また彼女がかつて女官をつとめ、ヴィクトリア女王の信任が厚かつたことから、女王に対し、日本に有利な進言をしたとも言われている。⁽⁴⁾

このようにして彼女は、一躍「英国一の日本熱愛者」という声価を獲得し、以来ロンドンで日本人留学生にさまざまな援助の手をさし伸べる事になった。下田歌子が助力を受けたのもこの頃で、下田は佐々木高行、土方久元らにゴールドンの厚情について種々書き送っている。伊藤博文には「ゴールドン夫人がまるで狂する如く世話致しけれ」とまれ夫人は当代英国女流中、至極評判良き

け者に候」と書き、女王在位六〇年の式典に出席するとき、ゴールドンに逢うようにと進言している。⁵⁾

(二)

それから一〇年が過ぎ、かつて日清戦争後の欧米諸国に台頭した黄禍論が、日露戦争を前にして再び高まってきた。

英国・米国の支援をたのみに日露戦争に突入した日本政府は、一九〇四年二月一〇日の開戦のその日、元通信大臣末松謙澄とその随員高楠順次郎、友枝高彦を英国に、数日遅れて金子堅太郎を米国に派遣した。伊藤博文の女婿、末松の発案によって行われた日本最初の国際広報活動であった。⁶⁾ 高楠への辞令には「御用有之英仏独三国へ被差遣」としか記されていないが、外交資料館所蔵の関係史料には、「日露戦争関係各国輿論啓発ノタメ」と明記されている。欧米に拡大しつつある黄禍論を抑えて、黄色人種への偏見を除去し、日露戦争に対する理解を得るのが使命であった。

英国においては、ケンブリッジ大出身の末松、オックスフォード大出身でミュラーに学んだ高楠が、それぞれ朋友知己を頼り、著述や講演を通して「文明国日本」や「東洋平和をめざす日露戦争」の意義を訴え続けた。

この時、高楠がミュラー未亡人や、英国随一の親日派と目されるゴールドンの協力によって、同盟国日本に英語図書館（日英文庫）を作ろうというキャンペーンを展開したのも、その活動の一

環であったに違いない。その発端については、後に東京日日新聞が次のように記している。「日露戦役中、末松男の一行として高楠文学博士が倫敦在留中、英国の紳士淑女は同氏の談話によりて我邦人の英語を解する者甚だ多きを伝聞し、戦勝国民として、将た又同盟国民として信頼すべき日本人の為に圖書の寄贈をなさんとて、某貴族夫人熱心に奔走、各富豪貴族等を勧誘して蒐集……」この貴族夫人はもちろんゴールドン夫人である。かつてフィラデルフィアに図書館を作った祖先への思いと日本への好意が、彼女をこの運動に駆りたてたのであろう。

ミュラー夫人とゴールドンは、友人貴族の協力を得て、英、米、加の新聞に、彼我の理解と親善のために家庭で読み終わった本を日本に贈ろうと広告し、ロンドンの『タイムズ』には詳しい記事も掲載された。⁷⁾ 事務所としたゴールドンの家には続々と書籍や基金が集まり、それはたちまち十万冊近い膨大な数となった。キャンペーンは大成を収めたのである。

この「日英文庫」に関して高楠は、『愛国婦人』『時事新報』『図書館雑誌』『東京日日新聞』等々に成立の事情を述べているが、国際世論啓発活動との関連については一切触れていない。運動の性格としては当然であろう。いまそれについて詳細を記す紙幅はないが、その背景をふまえ、運動の展開を追ってみれば、その意味は明らかである。

もっとも、この運動が軌道に乗る頃、日露戦争は終結を迎えて

いた。だがゴールドンにとって、それらは全く問題外であつたに違いない。彼女は日英文庫充実のために、その活動をそれから二〇年近く、彼女の死の年まで営々と続けたのである。そして最終的には一〇万三六九八冊が日本に寄付された。英国民の好意とゴールドン夫人等の献身によつて成立した日英文庫が、日本文化の向上と、日英両国の理解と親善にいかん貢献したかは、いまださう言うまでもない。

この時集められた書籍は、ゴールドンによつて Dulce Cor Librari (温かい心の図書館) と名づけられ、紆余曲折の末、折から開館を予定していた東京市立日比谷図書館に寄託された。当初の同図書館の蔵書は、和漢書が二万五〇〇〇冊、洋書が約一〇万冊で、洋書は日英文庫からの寄託書がその大半を占めた。それらの中から四万八〇〇〇冊をまず閲覧に供することとして、一九〇八年一月一六日に日比谷図書館の開館式が行われた。

この日英文庫は惜しくも太平洋戦争の東京空襲により、一九四五年五月二六日、日比谷図書館とともに全焼してしまつた。だが、県立山口図書館と県立長崎図書館には、明治末年に貸し出されていた複本数百冊が、戦災や時局におもねつた廃棄処分を免れて、現存しているという事である。

(三)

日英文庫提唱者ゴールドンが日比谷図書館寄託のために来日した

のは、一九〇七年八月の末であつた。それからの彼女は、一時の中断をはさんで、死ぬまでの一八年間を、日本を拠点として比較宗教学を研究するという、これまでとは全く異なる人生を歩むことになつた。

日英文庫のために同学の仏教学者高楠順次郎と接した事が、彼女を比較宗教学研究に回帰させる契機となつたのであらう。文庫寄託のための訪日の途中、すでにアジア各地でキリスト教の伝播の跡を調査し、中国で T・リチャード (漢名、李提摩太) に会い研究の指針を得ている。

来日後、程なく著わした *A Speaking Stone* の冒頭でゴールドンは、自分は仏教に関する知識が乏しいので、有名な支那学者について法華の法門を研究したと記し、「この支那学者は曾て馬鳴の起信論を訳し、その進歩せる大乘教理と耶穌教義の間に於て驚くべき同似点を発見したる人なり。余も亦仏教徒たる諸友の厚意によつて仏耶の両教義を比較し、其間に於て喜ぶべき思想の融和を認めたり」(高楠訳『弘法大師と景教——一名物言ふ石』)と書いている。これがゴールドンの仏耶一元論の初出と見ていいだらう。

この大乘起信論を英訳した支那学者が前記リチャードで、英国バプティスト派の宣教師として中国の思想や宗教を研究し、長年にわたつて独特の方法で中国伝導にたずさわつた人物である。その間、彼は幾度か来日し、ゴールドンとは高野山大学や三密会で研究報告や講演を共にするほど親しかつた。

また「仏教徒たる諸友」の一人である、高楠も当時「仏耶の接触及び調和」と題する講演や著作で、キリスト教の三位一体と仏教の三身即一など五項目を比較しつつ、仏耶両教の共通真理を探り、「両教提携調和の美徳を発揮してこそ、社会、人心に真理の光、命の水を与ふるを得べきなり」と述べている。この高楠は、かつてミューラーの許で研究していたとき、キリスト教ネストリアンの中国渡来の歴史を記した「大秦景教流行中国碑」の碑文作者アダム（景浄）が実在の人物であることを『貞元釈教録』の中に発見して、景教碑の偽造説を完全に払拭した事でも知られていた。それは唐におけるキリスト教と仏教の接触の証明であった。

ゴールドンは、これをさらに発展させ、この原始キリスト教が真言密教に伝えられたと考えた。彼女は八四一年会昌の弾圧により、景教碑が埋められた経緯をふまえて、次のように論じている。

「大師が長安に着せる時、市内に四大景寺あり、一大景教碑あり。英邁で新知識の吸収に熱中せる弘法大師が、十字架を冠し異文字を刻せる碑を見ぬことがあり得ようか——かの景教碑は物言う石として日出ずる国より遠来せる学問僧にその教えを伝え、能事終りて四〇年の後、土中に埋もれ、凡そ八百年間無言の石なり」。

そして安芸の宮島の弘法遺跡と伝えられる弥山の「消えずの火」に、キリスト降誕祭のユールログ（木頭火）との共通性を見出し、弥山本堂の幔幕や懸灯に印された叉竿（ダブルアックス）に、クリート島の神の表章との類似を発見して、古代ヨーロッパ文化

の弘法大師への伝承を確信した。（前掲『弘法大師と景教』）ここで彼女は改めて、仏耶両教を比較し、その歴史的連鎖と思想的連鎖の証明を発見しようと決意するのである。

やがて彼女は両教接触の証として、景教碑の複製を弘法大師ゆかりの高野山に建立しようと考えた。「キリスト教の碑を高野山に建立するについては、宗門に異議なしとはせず」と『高野山時報』は伝えている。だが彼女の熱意と開かれた宗門の伝統により、景教碑のレプリカが高野山奥の院に作られた。一九一一年のことである。ついで五年後には朝鮮金剛山長安寺にも同様の碑を建立し、ゴールドンは彼女なりの歴史的連鎖の証明を試みた。

ロンビア大学のフリッツ・ホルムが米英の大学から基金を募って、ニューヨーク市立中央博物館に景教碑のレプリカを建ててから、わずか四年の後のことであった。発見当時、ロゼッタ・ストーンに匹敵する史料と欧米の学者を驚嘆させた景教碑は、このようにして、はじめて日本に招来されたのである。やや精確を欠くとはいえ、宗教・歴史研究への寄与は大きかった。

当時、景教研究の世界的権威といわれた佐伯好郎が刊行した『景教碑文研究』は、彼自身の綿密な碑文解釈とともに、桑原隲蔵の『西安府の大秦景教流行中国碑』、高楠がフランス東洋学会誌『通報』に発表した前述のアダム発見に関する論文、そしてゴールドンの「弘法大師と景教——名物言ふ石」を収録して、当時の景教研究の成果を網羅した名著といわれている。この中で佐伯

は、高野山の景教碑について、今後吾国の学者が大いに欧米の学会に貢献することあらんと称えている。

高楠も雑誌『宇宙』で「景教碑はヤソと仏教の融和をはからんと、高野山上にゴルドン夫人が建てたのである。両教の教義の上に融和をはかつた事を見るべきである」と評価している。

一方、高野山大学教授村上博輔は、景教碑の建立を評価し、真言密教の宗風の中に流れているキリスト教との類似を具体的に認めながらも、「弘法大師が直接に景教と接したとは思わない。(長安において)新しい宗教として景教が当時の思想界に施したものを、当時の密教が可として、既に其教に取り入れていたものではないか」と考えている。⁽¹⁰⁾

(四)

日本全土および広くアジアを踏査して、実証的に仏耶一元の研究をすすめたゴルドンは、この十年近い歳月の間に、前掲の *A Speaking Stone* や *Messiah The Ancestral Hope of The Age*, *Lotus Gospel or Mahayana Buddhism*, *World-Healers or The Lotus Gospel*, *Symbols of The Way-Far East and West* 等を(ぎ)ぎに刊行した。また高野山の阿部全鼎と弘法大師伝の英訳をし、愛国婦人会、早稲田大学、高野山大学、東寺大学等で講義や講演をおこない、さらに高野山蓮成院では、一年近く滞在して研究に熱中した。

早大ゴルドン文庫には、敦煌などの考古学探検で著名な M・A・スタインがカシミールからゴルドンに宛てた手紙がある。そこには、ゴルドンが奈良で発見したロータス・ブリンセスの絵と、敦煌千仏洞の絹絵の類似に対する驚きが述べられ、それを指摘したゴルドンに対する感謝の言葉が記されている。また、オックスフォード大学の比較言語学教授 A・H・セースはゴルドンの著書 *World-Healer or Lotus Gospel* を読んで、その推薦文に「比較宗教について今まで書かれた中で最も興味深く、仏教と原始キリスト教の間にある密接な関係を美事に証明した、自分の仮説もここで証明された」と記し、「この書は東洋の宗教研究に新時代を築くであろう」と絶賛している。この時期はゴルドンにとって最も活力に満ちた日々であつたに違いない。

だがそこに、二つの悲報がもたらされた。一九一五年、前年始まった第一次世界大戦の最中、ロンドン郊外の病院で療養中の夫ジョンが死亡した。続いて翌年、ゴルドン・ハイランダース・レジメントの大尉であつた長男ロナルドが、フランス戦線で戦死したとの悲報が届いたのである。しかもそれを知らせてきた次男エリックの手紙には、「兄嫁は戦場で負傷兵の收容にあたつており、自分も飛行中尉として死を覚悟して戦っていると書かれていた。

ここに至つてゴルドンは遂に帰国を決意し、今まで研究のために収集したすべてを、大隈重信を介して早稲田大学に託すことにしたのである。これが、早大ゴルドン文庫である。

『早稲田学報』二六三号は、夫人の研究、略歴を紹介するとともに、大隈夫妻の主催で、天野為之学長、高田早苗名誉学長、塩沢昌貞理事、佐伯好郎が出席して行われたゴールドン夫人送別昼餐会の模様を載せている。その記事から、ゴールドンが早大にコレクションを委ねる決心をしたのは、早大で名誉講師として「比較宗教学」「西遊記」を講じた縁と、夫人が大隈夫妻を深く敬慕し、学問の自由を標榜することのような大学で、同好の士の研究に役立ててほしいと望んだためであることが読みとれる。このとき大隈は、平和が回復したら再び来朝して研究を継続、大成されん事をと願い、大学からの記念の金メダルを贈って別れを惜しんだという。一九一六年一二月、ゴールドンは横浜を出航、帰英の途についてた。ここで、大隈重信とゴールドンのこれほど親しい関係について考えてみたい。

『早稲田学報』一九〇八年二月号に、ゴールドンが自著やリチャードの『大乘起信論』など七冊を早大に寄付した記事があるので、二人の交流は来日後間もなく始まったと見ていい。ゴールドンはその後またたび英書を早大に寄付し、大隈もまた、自著『開国五十年史』(英文)を贈るなどして、その親交は深くなっている。

二人を紹介したのは、大隈と親しかった下田歌子か、早大の校友であり、一時、教職にもついていた佐伯好郎であろうと思うが確定できない。だが、ゴールドンが大隈を敬慕した理由の一つに、清国留学生教育に取り組む大隈への共感があったことは確かであ

ろう。

この清国からの留学生は、日清戦争ののち日本近代化の学習をめざして来日し、年ごとに増加していったが、この時、早大がその教育に主導的役割を果たした事はよく知られている。同じ頃、清国女子留学生を受け入れ、男子は早稲田、女子は実践と並び称せられたのが、下田歌子の創立した実践女学校であった。また高楠順次郎も外務省の依頼によって日華学堂を開校し、そこでは、やはり英国で学んだ末松謙澄が、教育勅語を清国留学生に教えていたという¹²⁾。

親しい人々のこのような活動を、ゴールドンは来日前にすでに聞き知っていたのではないだろうか。『周遊』第三版(一九〇三年)には、初版を書いた頃を回顧しながら、日本人が懸命に欧米に学んでいた時代からわずかしが経っていないのに、今はその日本に清国留学生が数多く学ぶようになった、と感慨をこめて男女留学生のそれぞれの概数まで記している。この事は、かつて英国在住の日本留学生から、「日本の母」と呼ばれたゴールドンが、その自らの姿と重ね合わせながら、下田や高楠の帰国後の活動を注目しつつづけていた事を示すものであろう。その中で当然に、大隈の清国留学生教育を知り、尊敬していたに違いない。やがて来日して大隈の知遇を得るようになった彼女は、その著書 *World Heals* (一九一三年)の献辞を大隈に捧げ、大隈がアジアの留学生に広く門戸を開き、清国留学生部を創設した事を称えている。

このように国籍や民族を超えて、学ぶ者を愛すること共鳴した二人の交流は、終生続いた。日英の親善、仏耶の一元という和合の世界を求め続けたゴルドンと、「東西文明の調和」をかかげて平和への道を探った大隈と、その理想に通い合うものがあったのではなからうか。

(五)

さて研究半ばで日本を去ったゴルドンは、大戦の終結を待ちかねていたのだらう。一九一九年の二月には早くも英国を出発して来日している。

夫と子供を失った彼女の英国での二年あまりの生活に関しては、まだ何も分かっていない。次男エリックについては、死亡を思わせるような資料があるのだが、今のところ確認できないでいる。夫ジョンが死の二年前に書いた一六ページに及ぶ遺言状が、ロンドンの Somerset House に保管されているのが唯一の手がかりである。妻と五人の子供への遺産の分配を記し、迫り来る戦争の危機を察知していたのか、欧州大陸や植民地に所有している資産や、信託財産の運用方法を懇切に指示している。だが夫人は間もなくこれらの資産を整理し、英国での絆を断って、ただ研究の継続完成だけを目指して日本に帰って来た。そこには仏耶一元の神への信仰とその許での往生の願いもあったのではなからうか。

彼女はこの頃すでに腎臓を病んでいた。旅を何よりの楽しみと

し、フィールドワークを重視した彼女が、この最後の六年間は研究に没頭し、宿所とした京都ホテルから、たった一度外出したただだったと伝えられている。その間、親身も及ばぬ世話をしたのが京都ホテル支配人淡川康韶であった。その息女佐々木孝子さんは父に連れられて時々訪れた部屋で、ベッドに上半身をおこして書き物をしていたゴルドン夫人の姿を記憶している。夫人は高野山や東寺の知友、特に高野山管長土宜法龍等に学問上の疑義を質しながら、研究と執筆に没頭し、つぎつぎに著書を世に送り出していたのである。それらは、仏耶一元論の集大成としての *Lotus Gospel* (改定版)、『大道無方・仏耶一元』という日本語書名を持つ *Asian Christianity and Mahayana*、その他 *Heirlooms of Early Christianity Visible in Japan* 等である。また、かつて彼女が編纂した *Treasures of Darkness and Songs of Ascent* を再版して病院や施設に寄付し、病む人や老人の心の安らぎを願った。また当時、米国で高まった排日運動に抗議し、ユダヤ人への援助も惜しまなかった。

その枕頭には常に、大隈から見舞いに贈られた、重信の母三井子が八八歳のとき、蓮の糸をつむいで織らせたという弘法大師像の額絵と、土宜法龍の見舞いである弥勒菩薩を祀っていた。当時の土宜法龍宛の手紙に、彼女は「この盆の季節に私は弘法大師の御画像に向い礼拝致居り候」と信仰を吐露し、また、「弥勒はヘブライ語のメシア、ギリシヤ語のクリストス、英語のクリスト、

と等しい梵語のマイタレーヤの訳語にて、仏陀とキリストは別異のものには非ず、一体不二にて候」とあくまでも研究者としての主張を展開して止まらなかった。

仏耶の一元を、その言語、儀式、思想の各方面から探究した彼女は、神仏習合を仏耶の關係に置き換えて、本地垂迹説に似た仏耶二元論を構築していたのである。

一九二二年大隈が逝き、翌年土宜が没した。そして一九二五年六月一七日、ゴルドン夫人は京都ホテル一号室において、ひっそりと亡くなった。享年七十四。戒名は密嚴院自覺妙理大姉。欧米人として真言密教最初の灌頂をうけた彼女の葬儀は、京都東寺において仏式で営まれた。高楠順次郎、浜田耕作、西田天香等幅広い会葬者の中に、東京から駆けつけた英国大使C・エリオットの姿もあった。日本仏教に傾倒していたエリオットは、ひとしお深く盟友ゴルドンの死を悼んだに違いない。彼はこの翌年大使を辞任した後、再び仏教研究のために来日し、やがて病を得て、帰国の船中で客死するという、ゴルドンに似た生涯を送っている。

一〇月四日、高野山大師教会でゴルドンの法要が営まれ、遺言に従って、高野山と朝鮮金剛山のそれぞれの景教碑のかたわらに分骨して葬られた。このとき淡川康韶が喪主をつとめたが、その息女佐々木さんは、七百名を超える法要の列に、ゴルドン家の人の姿はなかったと言っている。

いまロンドンに残る遺言状によれば、幾許かの遺産は英国の親

族と思われる二人に遺され、家屋などは売却して、そのすべてが聖書翻訳協会や船員施設に寄付された。書籍、器物は高野山大学に寄贈され、死の直前まで書いていた部厚い遺稿とともに高野山大学ゴルドン文庫（六三八冊）として残された。なお器物の一部は生前の約束に従い、バークマン博士を介してパレスチナのエルサレム大学に寄贈された。それは、京都太秦の豪族だった帰化人秦氏をイスラエル人の後裔と見て研究したゴルドンが、その証と考えた資料だったのだろう。佐伯好郎の『拂菻考』、『太秦（馬豆麻佐）を論ず』に影響されてゴルドンは日猶の關係論を研究していたのである。

高野山奥の院の墓碑は、ゴルドンが生前に自分でデザインしたものである。「弘法大師が唐において証得したという、高く昇った旭日の如く国民を覚照し、闇い所に座し死の影に住まうものを照し、平和の道に導くという、大光明（A Great Light）＝遍照の大日」を象徴する球を、八葉蓮華の台と十字架が支えるこの構図は、まさしく仏耶一元による平和への祈念であった。

だが、彼女の死後間もなく日本の元号は大正から昭和に改まった。ナショナリズムのが台頭、外来思想の排斥、ともはや仏耶一元論を受容する時代ではなくなった。それにつれて日英蜜月の時代を築いてきたゴルドン夫人の名も忘れられていったのである。

（一） 早大ゴルドン文庫蔵ゴルドン自筆メモ（一九一六年）。

- (2) *Gathered Grain*, 1871, *Things Touching The King*, 1873.
- (3) マラー編 *The Sacred Book of The East*, 1879, Elizabeth Anna Henryの論文。なお、『早稲田大学和漢書分類目録』(一九三九年)にゴールドン夫人の一八八六年卒業証書の記載があるが、今は所在不明である。
- (4) 下田歌子「目下米日中のゴールドン夫人を紹介する」(『愛国夫人』一三九号、一九〇七年)。三宅得聖「運華の福音とゴールドン夫人」(『中外日報』一九八六年)など。
- (5) 『伊藤博文関係文書』(同、一九七七年)。
- (6) 松村正義『ボーンマスへの道——黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』一九八七年。
- (7) *THE TIMES*, 23, Oct., 1905.
- (8) 佐藤政孝『市民社会と図書館の歩み』一九七九年。
- (9) 森睦彦『ゴールドン夫人と日英文庫』(『東海大学課程資格教育センター紀要』第一号、一九九一年)。
- (10) 村上博輔『唐景教考』(『密教研究』一九二二年)。
- (11) 『早稲田大学百年史』第一巻。
- (12) さねとうけいしゅう『中国留学生史談』一九八一年。
- (13) 『高野山時報』一九二二年六月二五号、同年九月一五号、他。
- (14) ゴルドン著、高楠訳『弘法大師と景教』。
(なかむら・えつこ、日本史・女子教育史、会員)